2007(平成19)7.15

漢詩神奈川

第２号

神奈川県漢詩連盟
横浜市旭区中沢
３－３９－９
電話045-361-2033
FAX045-361-2033
発行人 中山　清
編集人 田原 健一

第二回総会　開催さる！　会員１０３名に

神奈川県漢詩連盟の第二回総会が、平成１９年６月８日(金)、横浜市内の神奈川県近代文学館で、会員約４０名のご出席を得て開催されました。連盟設立後約８ヶ月、この間の活動内容と会計が事務局から報告され、又今年度の運営や活動予定等々について説明がなされました。各会員の方からの率直なご意見ご感想も出て、形に拘らない意見交換がなされました。創立時８３名でスタートした会員数も平成１９年５月末現在１０３名の規模に成ったこと、研修会、吟行会、初心者入門講座と活動の３本柱がそれ相応の成果を得、今後の連盟としての事業内容の方向が固まってきた事、その延長線で今年具体的にどう動くか等が主な内容でした。

詳細は後述の各報告をご参照ください。

◆第二回総会を終えて　会長　中山　清

六月八日（金曜）に神奈川近代文学館で第二回総会をひらきました。当初の六月九日（土曜）の予定を会場の都合で変更せざるをえなくなり、多くの方にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます。ウィークデーは皆様のご予定にも差し支え多かったことと反省しております。この反省を今後に生かしたいと考えておりますので、今回ご出席いただけなかった方々には次回は是非ご出席をお願いもうしあげます。

急にお願い申し上げましたにもかかわらず、窪寺先生には「現代日本人の漢詩」の題で、皆様の作詩に有益なご講演をして戴き、まことに有難うございました。一年をふり返ってという事でございますが、別に記事がのるようですので、所感の蕪詩をお目にかけることといたします。

神奈川県漢詩連盟発足一周年

周歳忽忽日月駆　周歳　忽々　日月　駆ける

吟行講習睦親娯　吟行　講習　睦親　娯しむ

可期成果累年後　期すべし　成果　累年の後

新畝萌生夢不孤　新畝　萌生して　夢　孤ならず

◆平成１８年度決算報告

連盟創立時からの初年度の決算は、６ヶ月の期間対応もあり左表のとおりお陰様で１２万円の黒字となりました。決算の処理にあたっては監事の住田笛雄氏の監査を経て今総会で承認されました。

平成１８年度決算

収入			支出	
一般会員会費	83名	166千円	通信費	31千円
賛助会員会費	4名	40千円	印刷費	47千円
計	87名	206千円	文具雑品費	15千円
懇親会参加費	40名	160千円	会場関係費	23千円
お祝い金他	2名	20千円	会議費	39千円
			懇親会費用	100千円
			郵便局払込料	9千円
合計		386千円	合計	263千円

収支尻　123千円　　現預金残高　129千円(預かり金 6千円)

◆貫道窪寺先生の講演
『現代日本人の漢詩』

快晴に恵まれた六月八日、満開の薔薇の香に包まれました港が見える丘公園の神奈川近代文学館に窪寺貫道先生（顧問）をお迎えし、私たちが上手な詩を作る為に参考になる「現代日本人の漢詩」という題で講話がありました。先生は長年国民文化祭の漢詩大会で、審査員をされていますのでその経験から最優秀の作品を紹介しながら、どういう詩作りをすれば優れた詩が出来るのか解説して頂きました。以下順にご紹介します。

一　雨餘題禪刹壁　愛知県　徠風　遠藤友彦

雨洗殘紅緑樹深
絶無塵處古禪林
晩來雲散下幽澗
半杓清泉帶月斟

雨は殘紅を洗い緑樹深く
絶えて塵　無き処　古禪林
晩來　雲散じて幽澗を下り
半杓の清泉　月を帯びて斟む

＊この詩は品がよく詩興の深い詩です。それは傍線を引いた字に現れています。又結句が素晴しく婉曲的な表現で少し汲んだ柄杓の水に月が浮かぶのを連想させています。そこにこの詩の奥深さが感じられます。

二　珂水舟行　神奈川県　丹林　吉岡　丹

古城橋畔柳風長
珂水滔滔送晩涼

古城の橋畔柳風長し
珂水滔滔として晩涼を送る

正好騒人乘月出
扁舟一葉向滄茫

正に好し騒人月に乘じて出で
扁舟一葉滄茫に向う

＊「城」は町のこと、「月に乘じて出で」は月を鑑賞する常套語、この詩の結句は作者自身の心境を景色に託しています。そのことを意象といいます。このように風景を詠んだ詩に意象を託す方法は昔からよく用いられていました。

三　水郷初夏景　千葉県　蘭裕　山崎友里江

風度青田暑欲消
筑峯隠隠水迢迢
竹枝閑聴渓蓀渚
少女回舟十二橋

風は青田を渡りて暑消えんと欲す
筑峯　隠隠として　水迢迢たり
竹枝　閑に聴く　渓蓀の渚
少女　舟を回らす　十二橋

＊この詩は有名な杜牧の「寄楊州韓綽判官」の詩を上手に引用しています。承句と結句の十二橋が響きあっています。また竹枝と少女としたところが気が利いています。

四　客舎逢春　神奈川県　古田光子

雨霽梅開暖意加
江南客舎鳥聲譁
遙憐故苑老槐樹
尚向寒天帶雪花

雨霽れ梅開きて　暖意加はる
江南の客舎　鳥聲　譁し
遙かに憐れむ　故苑の老槐樹
尚寒天に向かひて　雪花を帯ぶるを

＊麻韻は難しい韻ですが上手に出来ています。前半眼前の春の風景をそつなく表し後半は故郷を想像した風景を表しています。

五　早春新晴　三重県　川口恭一

春郊漫歩雨余天
日暖風軽柳帯煙
枯荻蕭条板橋下
小魚成隊遡晴川

春郊漫歩す　雨余の天
日暖かく風軽くして　柳煙を帯ぶ
枯荻蕭条たり　板橋の下
小魚隊を成し　晴川を遡る

＊前半は舞台装置としてのんびりとした春の風景を詠じ転句で冬の蕭条とした風景で前半と対比させ結句の景色で以って春の喜びを意象で表したところが上手です。

以上五首について先生の素晴しい解説で、今まで雅が無いとか、説明してはいけないとか、もっと婉曲にとかお叱りを受けていましたが、優秀者の皆様の詩をお手本にして、このような詩作りをすれば良いのだと理解できたような気がします。最後に窪寺先生の玉韻を紹介いたします。

丁亥六月遊横濱臨海公園　貫道　窪寺　啓

飛橋投影碧波悠
萬里長風到美州
丘上凭筇澄旱下
舶船来去白帆稠

飛橋の投影　碧波悠に
萬里の長風　美州に到る
丘上筇に凭る澄旱の下
舶船来去し　白帆稠し

（水城まゆみ　記）

□平成１８年度　活動実績

1．研修会　平成１９年１月２４日　横浜市開港記念館にて　参加者２２名
2．初心者講座　平成１９年３月６日～５月２９日　神奈川県近代文学館にて

受講者　月２回累計６回延１２９人
卒業見込２０名弱

3．吟行会　平成１９年４月３日　金沢文庫
及び称名寺　参加者３２名

4．会報　平成１８年１２月中旬発行

◆活動報告（1）

研修会に参加して

中野　國武

横浜市開港記念館は煉瓦建ての古い瀟洒な建物で国の重要文化財でもある。漢詩の勉強には相応しいと感心しながらも恐る恐る研修会場に入った。

会は、もっけから厳しい指摘で始まり、これは大変と覚悟をきめ傾聴し、素養の深さ浅さの差を痛感させられた。提出した詩について自分の意図なり考えを先に説明不味いなと思っている処は弁解もでき誤解は生じないが、中山座長を初めとした皆様の率直な忠告感想等は全て耳痛く拝聴、勉強になった。

小休憩の時である。絶世の美女が現れ傍聴させてくれとの事、爺婆の座は俄然色めいた。中国の方で名は陳蔭さん（後で当連盟に加入された）しきりに我々の漢詩への取り組みに感激、旨く皆さんで乗せたせいもあるが、皆の詩の中で彼女が好きな詩を3篇選んで朗詠してくれた。嬉しい事にその中に私の詩も選ばれた。

なんと、私の詩を中国語で朗詠してくれたのである。曰く素直さで選んだとの事、先ほどの皆さんの厳しい指摘はすっかり飛び散って消え、良い気分で夜道を帰った。

当然ではあるが、研修会は他流試合にも似て、刺激を受け意欲が増す。次回も出たい。

◆活動報告（2）

金沢文庫　称名寺の集まり

4月3日は生憎と小雨煙る肌寒い天候でキャンセルが出るかなと幹事少々心配をしたのですが、一人の欠席もなく32名のご参加をえて、吟行はさておいて会員間の懇親の実を上げることが出来ました。

石川岳堂ご夫妻や窪寺貫道顧問にもお出まし頂いて、金沢文庫で展示中の【弁財天展】を見、お隣の称名寺の庭を散策しました。

雨上がりの古い寺は、池の傍に満開の桜、朱い橋、煙る新緑、鶯の声まで揃えられては、詩作の一つや二つ簡単と思わせてくれました。

山門を抜けて料亭での昼食、お酒も入ってのお互いの簡単な自己紹介の後、石川窪寺両先生の即席の漢詩のご披露、陳蔭さんの朗詠も加わって盛会裡に終了しました。

宴席でご披露のあった石川窪寺両先生の詩をご紹介します。

金沢文庫清遊　岳堂　石川忠久

南武　存文庫　南武　文庫存して
人家　接四辺　人家　四辺に接す
秘書　蔵二酉　秘書　二酉を蔵す
奇勝　閲千年　奇勝　千年を閲す
微雨　景増趣　微雨　景は趣を増し
小鶯　聲愈妍　小鶯　声は愈々妍なり
閑庭　共酌酒　閑庭に共に酒を酌み
一日　喜詩縁　一日　詩縁を喜ぶ

雨中遊称名寺　貫道　窪寺啓

古刹庭園　煙雨濛　古刹の庭園　煙雨　濛たり
描弧跨水　板橋紅　弧描き水跨ぎ板橋紅なり
堂前桜影　靚妝盛　堂前の桜影　妝靚盛に
花片霏霏　淡彩風　花片霏霏たり　淡彩の風

PS．参加者の皆さんからご投稿頂いた称名寺吟行の詩は、小冊子にて先の総会の席上お配りしました。欠席された方でご希望であれば余部がありますので事務局までご連絡ください。お送りします。

◆活動報告（3）『初心者入門講座』開講

初心者入門講座は、平成１９年３月から５月末にかけて、見晴らしの良い神奈川県近代文学館において月２回のペースで計６回の講座がもたれました。受講者は当初３０人を超え２グループに分けざるを得ない状態でしたが、難しさからの脱落者も出て平均２２～２３名の方が出席し中山先生の講義を受けられました。連盟としては初めての試み、連盟設

立の目的、漢詩作りの普及と言う大命題そのものと世話役も大いに張り切りましたし、受講者からの作りたいという熱い気持ちがひしひしと伝わってきて、今後に向かって充分の手ごたえを得て、ぶじ終了しました。

◆「初心者入門講座」に参加して

生徒　乗竹　恒男

まず本講座をご企画頂き実施運営して頂いた中山会長はじめ関係諸先生方のご苦労ご尽力に心より御礼申し上げます。有難うございました。

私は本連盟の理事でもある石川芳雲先生からのお誘いを受け、これを好機として漢詩の勉強をしっかりしたいと思い講座に参加させていただいた次第です。受講し始めて中山先生の厳しい熱のこもったお話に感激しました。そして今までの私の漢詩に対する姿勢理解度があまりにも浅薄で出鱈目であったかを知り、目から鱗の落ちる思いで毎回の講義を拝聴しました。

☆三多ー沢山の漢詩を読む、沢山漢詩を作る、何度も推敲を重ねる。

この三多が如何に大切であるかを筆をとる度に思い知らされています。これからもお教え頂いたことを肝に銘じて、二、二、三語の発想にも習熟するよう心がけ、早くまともな漢詩が作れるよう努力します。そのうちに自分の心のモニュメントになるような詩が出来たらなあと、願っています。

どうか、これからも機会のあるごとによろしくご指導くださいますようお願いいたします。有難うございました。

◆「初心者講座」のお世話をして

先生　礒野　衛孝

初心者の方が漢詩の難解さに戸惑われないよう、中山会長のサポート役として我々執行理事の面々は授業を傍聴しながら生徒さんの様子を見守りました。皆さん、回を逐うごとに雰囲気にもなれ疑問質問も口にでるようになってきましたが、決まりの多い新しい世界、大半の生徒さんが何をどう質問したら判るようになるのか思案の様子でした。

第一回の講座の日にたまさかクイーンエリザベスII世号が横浜大桟橋から出航することがわかり、急遽授業も見物に間に合うよう早目に切り上げられました。大半の方が見物にいかれましたが、早速にこれで詩作の意欲を見せられた方、船名を漢字で書くにはどうすれば良いのかお悩みでした。先生のアドバイスは「固有名詞は副題に書く」でした。

昔からの巷説が頭に浮かびます。

☆「あちら立てれば、こちら立たず」

☆「それが判れば苦労はない」

まさにそうぼやきたくなるような手かせ足かせで、二四不同、二六対に弧平、冒韻と追い回されては、考えていた詩の筋道は右へ行ったり左へいったり支離滅裂となるのは、何も初心者の域とは限りません。

また、中山先生は結句が重要、特にその「下三句」と言われますが、まさにそれを選ぶのが至難の技、前述の諺どおりです。

それでも中盤から講座が終わるまでに卒業作品を作ってもらうという話が出てからは、俄然教室内の熱気が高まりました。6月末までに一首提出と言う事で、皆さんの自信なげな不安に対処すべく講座は終了したにも拘らず6月中旬希望者への個別の補習授業も実施されました。

受講者の方の提出された作品は、中山先生の最終添削を受けて皆さんに戻されます。きっと戻ってきた原稿は沢山の赤字で埋められて帰ってくると思われます。しかしそれが第一歩の踏み出しです。初心忘るるべからずです。

卒業後どう勉強すればよいのかとの悩みもお聞きしました。ご自身で「三多」の努力を続けて下さい。そのうちお仲間もできるでしょう。わが連盟でも生徒さんの勉強をサポートすべく秋には新人研修会を予定しています。

その折には作品を拝見させて頂くつもりです。

「試行　錯誤　□□裏」

「五里　霧中　□□行」

□□の中の漢字を考えてください。

今年の夏もさぞかし暑いこととは思いますが、漢詩の勉強を頑張って続けてください。

【漢詩の広がり】（2）

日本書道学院訪問記

水城　まゆみ

漢詩に興味がある方は詩吟や書の嗜みの人が多く、わが連盟にも吟社や書道会の方々が大勢おいでです。

今回は書と漢詩との繋がりという事で、日本書道学院の主宰であられる石川芳雲先生をお訪ねしお話を伺いました。

いろいろとお聞きした話では、書道の文字の8割から9割は漢詩の由、七絶五絶全部を書く場合もあれば、起承転結の中の一句を抜き出して書く場合も多く、その詩句を書くにあたってその意味合いが判っているかいないか殆んどの書家が字面からだけの浅い理解に留まっているのが現状でもっともっと漢詩の勉強が必要との事でした。また、その勉強の行き尽く先が自詠自書の世界であるとの事、逆に漢詩作りだけで来ておいでの詩人は、更に自分の詩を墨痕淋漓、紙に写す楽しみを追い求められては如何と耳痛いお話も伺いました。

また中国の書家との交流も頻繁にお進めになっておいでで、日中交流自詠自書も両国で交互に開催、日本代表としてもう数回訪問され、今年はこれも含め5回も中国を訪ねる事になると、お忙しい日々を楽しんでおいでの風でした。

漢籍書一杯の書斎にて

書道をもう一度やり直してみようと言う方がおいでしたらお繋ぎします。ご連絡ください。

◆ホー・チミンの漢詩

岡崎　満義

本棚の奥から、『ホー・チミン獄中日記―詩とそのひと』秋吉久紀夫編訳という本が出てきた。奥付を見ると、飯塚書店から1969年12月10日発行となっている。北ベトナムのホー・チミン大統領は、この年の9月3日に心臓病でハノイで亡くなっている。79歳。この『獄中日記』がすべて漢詩で埋まっているのが目を引いた。

1949年夏、ホー・チミンは中国で国民党警察に逮捕され、約一年間、南寧、桂林など各地の30余りの牢獄をたらい回しされている。その間、ホー・チミンは117編の漢詩を残している。獄中の厳しい生活や、祖国の自由独立を願う詩が大半だが、どこか叙情的な味わいもあって、魅かれた。

夜　冷

秋深　無褥　亦無毡
縮脛　弓腰　不可眠
月照　庭蕉　増冷気
窺窓　北斗　已横天

秋が深まるのにふとんがない／それに毛布もない／脛を縮め腰を弓のように丸めて見るが／眠ることができない／中庭のバナナの葉に月光は照り／冷えてゆく空気はきびしさを増してくる／窓越しに外を眺めると／北斗の星はもう天に横たわっていた。

平仄も韻もきちんとした詩だ。中にパロディ風の詩もあった。

清　明

清明　時節　雨粉粉
籍裏　囚人　欲断魂
借問　自由　何処有
衛兵　遙指　弁公門

杜牧の詩のもじりである。第一句は全く同じ。第二句は「籍裏囚人」が杜牧では、「路上行人」。第三句は「自由」が「酒家」。第四句は「衛兵」が「童牧」、「弁公門」が「杏花村」と変えれば、そっくり杜牧の「清明」になる。獄中のありあまる時間をもてあまして、ホーおじさんはこんな悪戯をしてみたのだろう。「自由何処有」という切実な思いには違いないが、全体にユーモラスな気分が流れていて、単なる剽窃ではないように思える。

◆明治初期に横浜港を詠んだ漢詩

中山　清

漢詩つくり入門講座の会場が、港の見える丘公園の一隅にある県立近代文学館でしたので、毎回、横浜港に停泊する豪華客船を目にすることが多かったと記憶します。受講生の習作でもクイーンエリザベス二世号や港の景色がとりあげられていました。ここでは明治初期の横浜港にまつわる漢詩をとりあげてみたいと思います。当時の人々が西洋伝来の新しいものに対して抱いた感慨と表現を知ることが出来ると思います。

鉄　橋　　橋本　海門

仰疑玄蝎渡江来　仰ぎ疑う 玄蝎 江を渡り来るかと
四面腥風水霧開　四面の腥風　水霧　開く
忽見汽船過橋底　忽ち見る汽船の橋底を過ぎるを
行人脚下起狂雷　行人の脚下　狂雷　起る

玄蝎はサソリ、水霧はきり、川ぎり。鉄橋を無気味なサソリにみたてるとは私には意外でした。狂雷にたとえたのは、鉄橋を人が通っていて、橋下を汽船が通る時の汽笛でしょう。現代のわれわれは、横浜ベイブリッジをすいすいと高速で何の感慨もなく通り過ぎていますね。（詩は明治の詩作の本にでていたもので、作者については今のところ未詳です。）

火輪船　　広瀬　林外

海門昼暗火輪烟　海門　昼暗し火輪の烟
清世不煩烽燧伝　清世　煩わさず烽燧の伝えるを
喇叭啾啾胡樂動　喇叭　啾啾　胡樂　動き
鎮臺今日在英船　鎮台　今日　英船に在り

転句の啾啾の啾は口偏に愁を添えた字を作者は使っています。大漢和辞典にはありますが、普通の辞書にない字で、ここは勝手に同じ意味の字にしました。さびしい聲です。喇叭の音は普通は高い音ですが、ここは音楽ですから寂しい声だったのでしょうか。作者は、広瀬旭荘の子で淡窓の養子となり、淡窓没後は咸宜園で教え、維新後上京して修史館に入ったが、明治七年三十九歳で病没しています。

横浜のまちについては永坂石埭の「横浜竹枝詞二十四首」があり、三首は『新日本古典文学大系明治編第二巻』に載せられています。一首は石埭の師である森 春涛の和詩とともにみることにしましょう。

横浜竹枝（二十四首中）　永坂　石埭

天女街頭二分月　天女街頭　二分の月
佛郎館外一枝簫　佛郎館外　一枝の簫
繁華端合揚州比　繁華　端合(ただまさ)に揚州に比すべし
十里珠簾十七橋　十里の珠簾　十七橋

天女街は弁天通り、佛郎館はフランス領事館。今は伊勢崎町あたりであろうか。当時は弁天通りが繁華街の代表であったようです。

横浜竹枝

此港本邦居第一　此の港　本邦第一に居り
雨中絲索月中簫　雨中の絲索は月中の簫
繁華勝概応無比　繁華の勝概　まさに比なかるべし
石造楼台鉄造橋　石造の楼台　鉄造の橋

港町横浜の、異人さんによる賑やかさがうたわれ、鉄橋や石造の建物が文明開化の代表選手だった様子がわかります。

最後に、旧幕臣（騎兵奉行、外国奉行）から新聞社社長になった成島柳北の颯爽たる詩でしめることにしましょう。

十月十七日乗米国蒸気船発金港　成島柳北

風怒海門霜氣澄　風　怒り　海門　霜気澄み
汽船萬里去如鵬　汽船　万里　去(ゆ)くこと　鵬の如し
長天一望毫無物　長天　一望　毫も物なし
皎皎當檣大月昇　皎皎　檣に当たって　大月昇る

◆『座間・谷戸山漢詩展』のお知らせ

座間市にお住いの会員岡田泰男さんが左記内容の漢詩展を開かれます。お家の近くの谷戸山公園を毎日散策、一日一首の詩作を続けておいでですが（凄いですね）、今回関係者に依頼されて『谷戸山の四季を詠む』漢詩展が実現します。

県立座間谷戸山公園は昔懐かしい里山の風景を大事にした公園で、ぶらぶら散歩にはもってこいの場所です。お閑の方は公園散策がてら吟行がてら岡田さんの漢詩展を見学なさっては如何ですか。展示場所は公園のすぐ横の図書館です。公園内の里山体験館も覗いてみてください。一日一首の出来たての岡田さんの詩が掲示ボードに出ている筈です。

◎『座間・谷戸山漢詩展』

＊期間　平成19年9月8日～11月2日
前期後期に分けて作品の入れ替えあり

＊場所　座間市立図書館ミニ展コーナー

お問合せは岡田泰男さんあて
電話　046（254）0696

◆懇親会での話

桜庭　慎吾

先日の総会の後、ホテルポートヒルでの話である。

港を見下ろすポートヒルの3階での懇親会は、40名弱のご参加を得て、午後3時半から5時までくつろいだ雰囲気のなかでの歓談のときをすごした。

来賓や役員のご挨拶のあとの今回の余興は3名の方での詩吟の競演であった。当連盟の監事住田笛雄さんは当日の総会で配られた金沢文庫の吟行詩の中から3首を朗詠、会員の宇都宮義久さん、山崎勝枝さんは我々もよく知っている中国の有名な詩をご披露され、座を持ち上げて頂いた。

あいつぐスピーチの中で、当連盟理事の石川芳雲先生から同席の窪寺貫道先生に左記の詩が奉呈された。

謹次韻以奉道謝　芳雲

慕白　懐陶　翰墨顛
元来　最愛　酒中仙
昨今　避得　堕泥酔
塵裡　老残　猶泰然

謹んで次韻し以って道に奉り謝す
白を慕い陶を懐う翰墨の顛
元来最も愛するは酒中の仙（李白）
昨今避け得たり泥酔に堕ちるを
塵裡に老残して猶を泰然たり

この詩には前段がある。話は2ヶ月ほど前の連盟の理事会に遡る。この集まりの食後の歓談の席で、貫道先生が左記の詩を芳雲先生に贈られた。

戯贈芳雲先生　貫道

一年　三百　六旬四
四日　應知　凌謫仙
賢聖　親来　重盞久
酔中　揮翰　自悠然

戯れに芳雲先生に贈る
一年三百六旬四
四日応に知るべし謫仙（李白）を凌ぐを
賢聖に親しみ来りて盞を重ねること久し
酔中に翰を揮いて自から悠然たり

なるほどと頷かされるのは、貫道先生の詩が李白の『贈内』（内に贈る）の詩を踏まえているからである。

三百　六十日
日々　酔如泥
雖為　李白婦
何異　太常妻

酒好きの李白に比べて、一年のうち四日間も酒を飲む日が多いと言う芳雲先生、酔中になお翰を揮って悠然としている―という意である。

因みに李白の詩の『泥』とは、南海に棲む骨のないぐにゃぐにゃした虫のことで、『泥酔』という熟語はこれから生まれたとの貫道先生のお話、これも耳新しかった。

風雅に溢れた両先生のやりとりであった。

“カレンダーに予定をご記入ください。”

◆今後の事業予定

研修会、吟行会の行事内容が固まってきました。詩作はある意味で孤独な作業ですが、労、興を同じうするお仲間との交流があれば一段と張り合いも増すものと考えます。交遊の輪を広げる機会です。奮ってご参加ください。

1. **研修会**　事前に詩句一首をご投稿願い、集まった詩稿を参加者にあらかじめお配りし、当日参加者皆で互いに推奨・講評等のご感想を述べ合います。参加者が多い場合は十名程度に分けて実施予定です。ご参加をお待ちしています。
時期　平成１９年１０月２３日（火）午後１時～４時
場所　神奈川県近代文学館　２階会議室
参加申込及び詩作提出期限　平成１９年１０月１０日（水）
同封投稿用紙にて事務局あて申し込む。

2. **新人研修会**　今年度の初心者入門講座を受講された方へのフォローの為の研修会です。できればその後の勉強の成果を持参のうえご参加ください。
日時　平成１９年１０月１６日（火）午後１時～４時
場所　神奈川県近代文学館　２階会議室
参加申込み　葉書にて平成１９年１０月１０日（水）までに申し込む。

3. **吟行会**
日時　平成１９年１２月５日（水）午前１１時～
ＪＲ北鎌倉駅前に集合
場所　鎌倉　円覚寺（鎌倉の紅葉は遅くこの時期が見頃）、円覚寺の境内を散策
昼食は精進料理〔針の木〕
会費　４千円

4. **初心者入門講座**　事始めは４月と言う事で第２回講座は来年４月から実施の予定です。

◆平成１９年度予算

今年度の予算は左表のとおりで、経費節約に努めながら事業の展開を図ります。

収入		支出	
会員会費	200千円	通信費	35千円
		印刷費	50千円
		文具雑品費	15千円
		会場関係費	30千円
		会議費	50千円
		その他予備費	20千円
合計	200千円	合計	263千円

◆編集後記

ここ１０年、お隣りの国の膨張振りはまさに眼を瞠るばかり、世界の工場としてみるみる経済市場を席捲し、政治の面でもいまや米ソでなく米中の対峙である。急速な経済変貌を身をもって体験してきた我々世代としては、はなはだ複雑な心境である。今あちらの人は何を考え暮らしているのか、経済発展の先に辿り着く都市文明での物心両面の変わりようを知って欲しいとも思う。

杜甫や李白が今生きていたら、凄いスピードで変わっていく国情をどう詠んだだろうか。中国産のスナックかどうかを確かめながら、人の心を思った。

（田原）